

《新刊紹介》

孫安石・大里浩秋編著『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』
(東方書店、2019年3月、A5判345頁、4500円)

崔 蘇丁

近代中国留学生の研究にとって、「国家」と「近代化」は重要な課題である。日清戦争の後、中国は第一波の日本留学ブームを迎えた。日本に倣い、国家改革を行い、弱小国の地位から脱することは当時の多くの留学生の夢であった。中国の多くの革命家、教育家、作家は日本に留学した経験を持っていた。彼らは革命理念において日本文化の影響を深く受けつつ、自由、民主、強盛の近代的中国を建設することを目標とした。それゆえ、中国人留学生の研究をする時、「愛国」も欠かせない一部である。

本書は留学生組織、留学生文学などの細部を通して、「国家」「愛国」「近代」という三つの面を分析する、さらに中国人留学生の全体像を描き出すことを重視している。

以下は本書の構成である。

第Ⅰ部 中国人留学生と「国家」の発見

清国留学生会館研究初探—「国家」と「愛国」のはざま...孫安石

清末中国人日本留学生の初期活動について—勵志会と訳書彙編社を中心に...郭夢垚

中国人留学生の日記から読み取る日常生活—下宿屋という都市空間を中心に...樊殿武

第Ⅱ部 中国人留学生と文学—「愛国」を求めて

余計者としての留日学生—張資平「一班冗員的生活」を中心に...林麗婷

留学と愛国、そして詩—聞一多と鄭伯奇・穆木天...鄧捷

中国人留学生が語る「日本」—郁達夫「帰航」とイギリス排日小説『キモノ』(Kimono)...中村みどり

中華学芸社とその機関誌「学芸」について...潘吉玲

第Ⅲ部 戦争と混乱の狭間でみた「近代」

「満州国留日学生会」の諸活動とその実相...見城悌治

「対支文化事業」における「特別講習会」—東京帝国大学農学部的事例を中心に...三村達也

一九五〇年代半ばの中国留日学生と日本国費留学制度再開...川島真

一九五〇年代六〇年代の中国留日同学会と華僑社会—陳学全さんに聞く...大里浩秋

第Ⅰ部のテーマは中国人留学生と国家との関係である。三人の論文は公的組織、民間組織、留学生個人の三つの視点から、中国人留学生の国家に対する認識を分析する。当時の中国人留学生の留学生活の一部を述べている。

まず、孫論文は公的組織としての清国留学生会館について、会館の起源、人員、機能、そして日本で行われた学生活動について詳しく紹介している。清国留学生会館は公的組織として学生の生活を保障し、新規留学生に対する一連の援助、例えば出迎えを派遣し、荷物を運ぶことを「招待規則」に定めていた。孫論文は留学生が順調に学業を完成させ、帰れるようにしていたことを明らかにした。

公的組織ではない民間組織としての勵志会と訳書彙編社は中国人留学生自身が設立した組織である。郭論文は民間組織の「国家観」という概念に注目している。成立過程、組織に参加した留学生たちの生活について考察する。そして、その後の発展も詳しく述べている。郭論文では、当時の社員たちは地域により、学校により政治理念が異なっていたとともに、強い国を作るために、社員になり、文章を書き、外国文学を翻訳していたことを明らかにした。

欒論文は宋教仁と黄尊三の日記によって個人の視角から当時の留学生の生活状況を分析している。宋教仁は清朝末期民国初期の革命家・政治家である。黄尊三は教育家である。欒論文は当時の二人の生活環境と交友関係を明らかにする。日記の記録から当時の留学生活のさまざまな側面、例えば、二人の下宿、食事、学習生活などをうかがい知ることができる。その中で下宿屋問題についてより深く分析することにより、当時の留学生の生活環境を知るだけでなく、下宿屋の経営者の立場も深く知ることができる。日本政府の下宿屋に対する政策についても言及している。

第Ⅱ部の論文はそれぞれ異なった作家を選び、文学の角度から留学生の愛国心を分析している。

張資平の「一班冗員的生活」は第一次世界大戦後の困窮した中国人留学生の姿を描く小説である。林論文の推測によると、この小説には張資平自身の経験が多く含まれている。なぜなら、張資平が日本に留学していた期間は小説の時代とほぼ同じだからである。この小説からわかるのは、貧困は当時の多くの留学生が直面していた問題ということである。当時の中国は段祺瑞の北京政府と孫文の広州政府が対抗する、南北対立の局面に入っていた。加えて、北京政府の各種外債と戦争借入金によって留学生の送金不足が常態となっていた。林論文はその時代と張資平の生涯を詳しく紹介したうえで小説の分析を行い、一括りにできない民国初期の中国内部の社会状況を浮かび上がらせ、留学生及び中国政府双方に批判のまなざしを投げかける意図があったことを明らかにした。

かにした。

鄭論文は、聞一多と鄭伯奇、穆木天の詩論を選んで分析することで、留学をきっかけにして得た詩論の特質を明らかにし、詩論から近代中国知識人の精神を描く。聞一多は国学を提唱し、伝統文化を重視し、彼の作品にはナショナリズムが溢れていた。同時に彼は詩歌は芸術のために存在すると思っていた。鄭伯奇は「国家」「国民」と「文学」は切り離すことができず、「文学」は「国家文学」でなければならない、作家は「個」を通して国民の意識と感情を表現しなければならないと主張した。「国民文学論」の中で、鄭伯奇は精神面で民族の自信の確立と国民意識の重要性を詳しく述べた。穆木天の象徴詩は「国民文学論」の影響を受け、個人主義、つまり個性を提唱している。

中村論文は、創造社で中国人留学生が書いた複数の作品を論じ、特に鄭伯奇の「最初之課」と郁達夫の「沈淪」を中心に分析した。鄭伯奇の「最初之課」は創造社の中でどのように位置づけられるか、及び郁達夫にとって「個」を描くのはなぜかという問題を指摘した。特に創造社は「個」を描くことを主張した。そしてそれが中国近代文学において大きな意義を持つことを明らかにした。

潘論文は、中華学芸社とその機関誌『学芸』の全体像を明らかにしたうえで、中華学芸社の大正教養主義が中国の新文化運動と連続性があること、及び創造社のメンバーが参加していることを示した。日本時代の『学芸』には大正教養主義の影響を受け、儒学から近代的な学問観へ転換し、学問が政治から独立したカテゴリーとみなされるようになった。そして、新文化運動を背景として中国で再刊された。『学芸』からは「科学の革命」と「社会主義革命」という二つのキーワードが浮かび上がるが、「科学の革命」は日本の大正教養主義を色濃く反映する。そして、メンバーの中で郭沫若を除く、多くのメンバーは「社会主義革命」の実行には賛成しなかった。

第Ⅲ部のタイトルは「戦争と混乱の狭間でみた「近代」」であるが戦後にも触れており、本部の論文は時間順によって書かれている。中国人留学生の研究において無視されやすい面を選んで論じている。

満州国留日学生会は特殊な存在である。当会の主な目標は満州国と日本の民間の友好関係を築くことであり、主な責任者も日本人である。『満州国留日学生会会報』に提示されている当会の各規則の主な思想も日満一体である。そのため留学生たちは「修練」活動に参加しなければならない。満州国留日学生会の「修練」活動は満州国人留学生たちに「日本精神」を身につけさせる活動であるが、実際に良い効果はなかった。そして、満州国留日学生会自身にもさまざまな問題が出てきた。見城論文は『満州国留日学生会会報』を中心に満州国人留学生による日本側との交流と摩擦を明らかにする。

「対支文化事業」には、(1923年、義和団事件の賠償金を事業基金として用い、外務省管轄の

文化事業として始まる)「特別講習会」という中国人留学生を支援した事業があった。三村論文は当事業について東京帝国大学農学部の事例を中心として研究を展開した。教員個人の身分によって「特別講習会」の開催を申請した大学は東京大学のみであったので、東京大学を中心に考察する。そして、「特別講習会」の創立、参加者、会計状態、講義内容、見学旅行などを分析した。「特別講習会」で育成された人材が日中の相互理解に果たした役割を明らかにする。

1950年代、日華講和条約の締結及び日本国費留学制度の再開により中国人留学生の人数が増え始めた。日本が国費留学制度を回復した後、中華民国(台湾)も自身の留学生政策を調整し、留学生の選抜政策を制定した。中華民国(台湾)の日本留学が正常化した後、香港の留学生を獲得するため、中華民国(台湾)は香港で大量の留学生を募集していた。同時に中国共産党も留学生や華僑の支持を求めている。共産党は日本では合法的な存在であるため、日本政府は共産党のいかなる合法的な行動にも介入できず、学生の帰国運動も止められなかった。そして、多くの台湾人留学生は大陸に家族がいるので、大陸に帰った。この点に関して、川島論文は第二次世界大戦後の中国(大陸、香港、台湾)の日本留学政策の形成と戦後の日本及び中国各地域(大陸、香港、台湾)の留日学生に対する認識を明らかにする。

最後は陳学全の取材記録である、陳学全は華僑二世として、多数の中日文化団体を運営している。このインタビューで、1950-1960年代の留学生や華僑学生の活動の流れを明らかにした。人民共和国の留学生たちへの救済金や人民共和国への帰国運動という研究課題も提起されている。

以上簡単であるが本書の内容を紹介した。本書の長所は、中国人留学生について多面的に分析したことである。この本は民国初期から人民共和国成立前期の中国人留学生の諸相を詳しく理解できる、私の研究にとって大切な文献である。この本により異なる時代の中国人留学生の生活や思想、国家建設に対する努力などを容易に見てとることができる。同時に、中国の近代政治が中国人留学生に与えた影響を明示している。また、日本側の資料も非常に詳しく、データがわかりやすい。近代中国人留学生の生活及び近代中国の政治に興味を持つ読者に、この本を推薦したい。